



図書館だより

2021.11
No. 36

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123
TEL 0956-47-2191 (代表)
<http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

気になる国を ウォッチング してみませんか

代田 義勝
(経営学部長)

日本のことをしっかり理解しようとすれば、外国との比較は欠かせません。私の専門領域の人的資源管理においても、諸外国と比較するからこそ、例えば、新規卒者一括採用が特殊日本的な採用方式であることが分かるわけです。グローバル・スタンダードは会社のポストに空きが生じた際にそこを埋める欠員補充方式ですから。

多くの国に目を向けられればそれに越したことはありませんが、まずは、興味の持てそうな一カ国を継続的にウォッチングするようにはしてみてもはどうでしょう。日本の常識が他の国では非常識であることが分かったりして、日本に対する理解がいつそう深まったりします。

私自身がずっとウォッチングしてきている国は北欧のスウェーデンです。人口規模で言えば高々一千万人の小国ですが、日本の現状や将来を考えていくうえで多くの示唆を与えてくれる国です。

スウェーデン・ウォッチングの始まりは、もう何十年も前の大学院生の時代に遡ります。当時、人的資源管理研究の分野で、私が最初に取り組んだテーマが「労働の人間化」で、企業によるこの「労働の人間化」の取り組みの先進地がスカンジナビア半島、とりわけスウェーデンだったのです。自動車組立でコンベア・システムを廃止したボルボ社のカルマ

ル工場は殊に有名でしたが、同時にすでに数百の企業による「労働の人間化」の実験的プロジェクトが実施されていました。

入り口は「労働の人間化」でしたが、なぜ「労働の人間化」がとりわけスウェーデンにおいて急速に広がりを見せたのか、どうしてもそこが気になります。そして、それを理解するためにはスウェーデン社会そのものを理解する必要があります。こうなると、ウォッチングの範囲は、スウェーデンの福祉、政治、経済、教育、税制、そして年金等々と拡大していくことになります。

スウェーデンをウォッチングしていると、スウェーデンは人にやさしく企業に厳しい社会であることがわかります。スウェーデン社会の姿を念頭に日本に目を向けると、日本は人に厳しく企業にやさしい社会に見えます。スウェーデンは国の哲学として衰退企業や斜陽産業に決して救いの手を差し伸べません。福祉国家を維持・発展させていくためにはこれから伸びていくであろう企業や産業にお金や人材を集中させる必要があるからです。

他方で、社会的弱者が主体的な選択ができない状況が生じているとすれば、社会の仕組みに問題があると考え社会の仕組みの側を変えようとしています。共生社会の実現です。こういった社会であれば、人生で最も多くの時間を過ごす職場に対して良い環境や良い労働を求めるようになることは必定です。

最後に、それなら、まずは、スウェーデンをウォッチングしてみようと思い立った方のために、スウェーデン・ウォッチングのための案内書を紹介したいと思います。

高福祉なのに高成長の「不思議な」国スウェーデンの形成プロセスや仕組みを知りたいなら、宮本太郎『福祉国家という戦略

スウェーデンモデルの政治経済学』(法律文化社、1999年)と湯本健治・佐藤吉宗『スウェーデン・パラドックス 高福祉、高競争力経済の真実』(日本経済新聞社、2010年)がその謎を解き明かしてくれます。前者はスウェーデン福祉国家がどのように形成され展開されてきたか、すなわち、スウェーデンがどのように経済合理性や経済成長との両立を図りつつ福祉国家戦略を生み出してきたか、そのプロセスを明らかにしてくれています。そして、後者は高福祉・高負担でありながら

高成長・高競争力を維持する、そのスウェーデン・パラドックスの仕組みを明らかにしてくれています。

少々専門的になりますが、人的資源管理の分野ですと、猿田正機『福祉国家・スウェーデンの労使関係』(ミネルヴァ書房、2003年)が日本との比較を通してスウェーデンの労使関係・人的資源管理の全体像をつかむために有益です。本書は生活者視点の記述もあり研究書でありながらスウェーデンを身近に感じられる著作となっています。

「データサイエンス入門」の 入門準備に薦めたい3冊

石 田 和 彦

(附属図書館長)

いま世の中では、「データサイエンス」が一種の流行のようになっています。経済・社会の様々な課題を解決していくためには、情報化がもたらした大量のデータ(しばしば「ビッグデータ」とも呼ばれます)を的確に解析し、ビジネスの企画や政策立案に用いることのできる人材が不可欠です。こうした中で、2016年に文部科学省が『大学の数理・データサイエンス教育強化方策について』で、「文系・理系を問わず、全学的な数理・データサイエンス教育を実施」することを求めて以降、多くの大学がデータサイエンス教育に力を入れるようになりました。データサイエンス学部も、雨後の筍のように、あちこちの大学に創設されています。さらに2019年には、政府が『AI戦略2019』の中で、約50万人の大学卒業生全てが、数理・データサイエンス・AIのリテラシーを身に着けることを目標に掲げました。

このような世間の流れの中で、ようやく、本学でも、今年度の新入生から、「データサイエンス入門」が全員に必修科目として課されるようになりました。このこと自体は望ま

しいことだと思いますし、必修にはなっていない2年生以上の在学生の皆さんも、社会から求められる人材になるために、在学中にデータ分析のスキルを身に着けておくことを強く薦めます。

しかし、一方で、そうは言ってもやはり「文系」が多い佐世保校の学生の皆さんにとって、「データサイエンス」はかなり高いハードルであろうことも痛感しています。今年度、全学教育科目の「統計学」を担当しましたが、多くの受講生の皆さんから、「数式が出てくるとついていけない」、「Σ記号を見ただけで敬遠したくなる」といった感想を頂きました。「統計学」や「データサイエンス」は大量のデータを扱う以上、Σをはじめ数式を使った方がはるかに簡単にコトを進めることができるのですが、既に、これまでの教育の中で数式に強い「抗体」を身に着けてきている多くの学生の皆さんには、いくらそう力説しても仕方ないのも事実でしょう。

そこで、今回は、「データサイエンス入門」のさらに入門準備として、「抗体」反応を起こさずに読める本を3冊薦めたいと思います。まず1冊目は、『文系のためのデータサイエンスがわかる本』(高橋威知郎、2019年、綜合法令出版)。何よりも、この本は縦書きですので、多くの皆さんが拒否反応を示す数式がありません。代わりに、図やグラフを多用しながら、なぜデータサイエンスが必

要なのか、データをどう分析してどのように役に立てるのかをわかりやすく解説しています。2冊目は、『データサイエンス「超」入門』（松本健太郎、2018年、毎日新聞出版）。この本は、副題に「嘘をウソと見抜けなければ、データを扱うのは難しい」とあるように、様々な数字やグラフと、それらに基づいて行われる一見尤もらしい議論や主張に隠されている「嘘」を見破る術を説明しながら、自然にデータ分析の基礎がわかるように書かれています。数式もあまり登場しませんし、多くの題材が、佐世保校の学生の皆さんにも馴染みの深い人口や経済に関するデータから採られている点でも、読みやすいのではないかと思います。

ただし、取りあえずはこうした数式の登場しない入門書で「データサイエンス入門」の入門準備をしたとしても、数式に対する強い「抗体」を抱えたままで、これからの高度情報化社会を生き抜いて行くことは困難です。そこで、データサイエンスからは少し離れますが、最後に、この機会に数式に対する「抗

体」を根っこから取り除くための1冊として、『子どもの算数、なんでそうなる?』（谷口隆、2021年、岩波書店）を薦めたいと思います。この本は、数学者である筆者が小学生の娘に算数を教えるという状況を通し、子どもの理解のどこで間違いが生ずるのか、間違い理由は何なのか、等を考えながら、位取り（10進法）、四則演算などの本質を鋭く捉えて解説しています。読んでいて、気づかされることも多い本です。大学生である皆さんに小学生の算数に関する本を薦めるのは、「いくら何でも馬鹿にするな!」と叱られそうですが、実は、こうした最初の出発点で本質をきちんと理解しないまま、形式的に計算の正解だけを追いかけて、中学・高校の数学へと進んできたことが、結果として、皆さんの数式に対する強い「抗体」を作る根本原因になっているような気がします。一読して頂き、この本を出発点にして原理・本質を根底から理解する姿勢で算数→中・高の数学ともう一度学び直しを進めれば、数式に対する「抗体」も自然に消え去るのではないかと思います。

勉強のスタートに 3冊の新書を

平 尾 盛 史

(経営学科講師)

この文章は主に学生のみなさんにとって、せっかくであれば少しでもプラスになることをと思い書きました。内容はタイトルの通り「勉強のスタートに、関連するテーマの新書をひとまず3冊ほどざっくり読むと良いですよ。」というものです。

新書とは写真にあるような書籍たちのことです。それらは比較的安価でコンパクトなサイズでありつつ、あらゆる専門分野について一般向けに噛み砕いてわかりやすく書かれています。早い人なら1時間～数時間、ゆっくりな人でも数日あれば十分に読み通せるで



しょう。

勉強の手始めに、これらの本に手を伸ばす最大のメリットは「分野全体を手短に俯瞰できること」です。例えば、みなさんが「データ分析」に興味を持ったとします。しかし最初は面白そうだという直感があるだけで（その直感は何より大切ですが）、「それが社会のどんな事象に適用されているのか」「それを扱うにはどんな技術を身につける必要があるのか」といった具体的事柄はわかっていないはずです。しかし新書をひとたび眺めれば、たったの数時間、数日でそれらの概要を大まかに掴むことができます。

あるいは、この手法の最大の目標は「その分野の主要テーマを押さえること」とも言い換えられるでしょう。ポイントは、その分野のライブ感を掴めれば良い、くらいのおおらかな心構えで大胆に読み進めることです。ノートを取る必要はありません。一方、これを分厚い学術書でやろうと思うとそれはもう大変です。勉強の開始時はモチベーションも高く、思わず厳しい専門書を手に取りたくなります。そうした背伸びも是非やって欲しいのですが、実際にはよほどの忍耐がない限りわずか序盤に力尽きます。それでは分野の全体像がわからぬままです。

もう1つのメリットは「より発展的な文献への入り口になってくれること」です。これには2つの意味があります。1つ目はとても直接的な意味です。ありがたいことに、新書の多くはより発展的に学びたい人用に、次に読むべき信頼できる文献を紹介してくれています。2つ目は、肩慣らしになるという意味です。新書はその分野のある種のカatalogのようなもので、例えば数学的な裏付けなど細かな点は割愛されています、が、その分野で議論される主要テーマのリストを教えてください。そしてそのリストさえ知っていれば、いざ専門書、学術書を読み始めたときに面食らって挫けるリスクが減ります。なぜなら、「知らないかつ難しい」事柄と「知ってはい

るが難しい」事柄とで、それに出会ったときの心理的な負担が大きく異なるからです。

また、これは特に複数冊読んだ場合に限りですが、「複数の書き手の視線を通してその分野を俯瞰できる」というのも見逃せない大きなメリットです。例えばマーケティングを例にとると、その分野の専門家だからと言ってマーケティングに関わるあらゆる分野にバランスよく精通しているわけではないです。人によっては消費者行動論が専門だったり、あるいは戦略論または流通論に軸足があったりするわけです。すると、同じマーケティングがテーマであっても、個々に独立した専門家によって書かれた本は互いに内容が異なってきます。良く言えばそれは本の個性です。しかしひとまずの目標「分野全体を手短に俯瞰する」からすると望ましくありません。複数冊読む、というのはこの偏りを緩和する効果があります。この話しは3人中1人しかしていないから優先事項ではない、一方でこの話しは3人中3人ともがしているから、優先的に理解しておくべきだ、といった具合に。

自身もこれまで、ここで紹介した手法を何度か実践してきました。その中には、今現在自身が研究者として活動するのに欠かせない仕事道具である「ゲーム理論」や「統計学」も含まれます。本で勉強、と聞くと苦手に感じる人もいるかもしれませんが、まずは気軽に新書を手にとって、興味の湧いた分野の勉強を始めてもらえればと思います。



世界を広げた 「アンネの日記」

三 浦 佳 子

(国際経営学科講師)

小学3年生のときだろうか、祖父が送ってくれた「アンネの日記」(文藝春秋)が私の記憶に一番古い「本」として刻まれている。父の仕事の関係で海外暮らしとなった私に日本語を忘れないようにと送ってくれた本の一冊だった。真っ白な表紙を開けると、2段組みでびっしりと文字が並んでいた。当時の私には読めない漢字が並んでいたため、どうしてこんなに難しい本を祖父は送ってきたのだろうか、もっと楽しい本を選んでくれたらよかったのにと思いつつも、硬いカバーに真っ白な表紙に惹かれた。そして毎晩、1ページずつ父が読んでくれることになった。アンネの置かれている状況を理解できず、「普通の女の子が普通の生活を楽しく書き綴った日記」としか思えなかった。毎晩聞いていると、彼女の初恋がどうなるのかと気になり始め、父がいない晩は自分で読み進めるようになった。

転校した日本人学校の初日に掛け算テストがあり、私は全く解けなかった。当時父の赴任地には駐在員が少なく、日本人学校は土曜日しか開校していなかったため、日本のカリキュラムより先に掛け算を終えていたのだ。そんなことを知らない私は学校嫌いになり、それ以降テストは白紙で出すという、両親泣かせの子供になった。学校から何度も呼び出しがあったらしい。もしかしたらそんな状況を聞いた祖父が気にして送ってくれたのかも知れない。祖父の思いは届いたのだろうか、その本がきっかけで、読めない漢字が並んでいる、内容が十分に理解できなくても、本を読むと「自分の知らない世界を見ることができる」と活字好きになっていった。また、本を読むということが、自分にとっての「逃



げ込める場所」になった。両親の本だろうとジャンルが何であろうとお構いなしに読むようになった。海外駐在員宅にまとめて届く日経新聞は、特にお気に入りの活字で、「大人の世界」の掲載小説にはワクワクしたものであった。

父の赴任先であったベルギーの公用語はオランダ語(フラマン語)、フランス語、ドイツ語の3か国語であるが、私が住んでいた地域はオランダ語が第一言語で、平日通っていた現地校では授業はすべてオランダ語。そう、アンネが使っていた言語もオランダ語であり、「アンネの日記」の原本が読めたのだ! 本を読むと、知識は増え、世界が広がる。日本語以外の言語が理解できると、その世界にも飛び込むことができる。オランダ語は私に自信を与えてくれた。

日本に帰国してからの生活は、日本での社会経験がなく、日本風に英語や社会や理科や音楽や体育を勉強することのなかった私にとって、何もかもが一からの勉強であった。

その時の支えとなったのは本だった。日本の学校の図書館は、海外とは比べ物にならないぐらい本がたくさんあった。本屋に行けば新刊の本がたくさん並んでいた。読み切れない量の本を抱えて帰るだけで幸せだった。

社会人になって最初の上司に「特定の国について理解するためには、政治・経済・社会・文化・宗教・言語、あらゆる分野を理解する必要がある。そのためには、現地に行く前に、本を 50 冊、100 冊、それ以上読みなさい。」と指導された。一緒に組むことになった外部の専門家は、打合せのたびに「何冊本を読みましたか？」と聞いてきた。その後ある人の一言で大学院に通うことになって、読まない

といけない本が増えた。そして、地域の図書館だけでなく大学の図書館も私の行先に加わった。課題として読まざるを得なかった本であれ、自分の関心事として読んだ本であれ、本は知識を増やし、世界を広げる。原語である外国語で読むと、違った世界が見えてくる。それが楽しかった。

「アンネの日記」は私に本を読むことを教えてくれた。真っ白だった表紙は汚れて黄ばんでいるが、私の世界を広げてくれる。

これから先、どんな新しい世界を私に見せてくれるのだろうか。楽しみは尽きることがない。

コロナ禍の中で 何を读もうか

伊 藤 泰 郎

(公共政策学科教授)

コロナウイルスの感染が日本で拡大してから、もう1年半が過ぎました。オンラインの授業が中心の生活が今年度も続いており、大学に入学したという感覚がまだつかめない学生は、1年生だけでなく2年生にもいるのではないのでしょうか。

私は今年の4月に長崎県立大学に着任しました。公共政策学科には私と同じ社会学が専門の伊藤康貴先生がおり、ややこしさを少しでも解消しようと、「背が高く年を取った方の伊藤です」なんて自己紹介を最初の頃はしていましたが、オンライン授業だと私の背が高いかどうかなんて分からないですね。私も対面で接することができたのは教養セミナーや基礎演習の学生ぐらいで、まだ学生のみなさんのことをあまりよく分かっていません。

でも、大学に入って「何かが違う」「うまくつかめない」という感覚に陥ることは、コロナ禍でなくてもよくあることなのかもしれ

ません。私の学生時代を思い返してみると、第一志望の大学をもう一度受験しなおそうかと2年生ぐらいまで考えていたような気がしますし、いくらか満足できる成績が取れるようになったのは、3年生になってからだったと思います（よく4年間で卒業することができたと思ってもいいですが）。

私は社会学の中でも都市社会学という領域を専門にしています。私が担当している講義は社会学の概論と社会調査に関する科目なので、あまり自分の専門についてあれこれ話す機会がありませんし、せっくなので都市社会学の本を1冊紹介することにしましょう。

堀川三郎という私より少し年齢が上の都市社会学者がいます。法政大学の先生です（教養セミナーで紹介した時に慶應って言ったかも…ごめん）。堀川先生は歴史的な景観の保存運動について研究をされていて、日本でそうした運動の先駆けとなった小樽運河をずっと研究対象にしてきました。私が大学院生の頃から、小樽運河と言えば堀川三郎。その集大成、33年間のフィールドワークが結実したのが『町並み保存運動の論理と帰結—小樽運河問題の社会学的分析』東京大学出版会（2018）です。

この本の冒頭は、1984年3月27日の22時、

堀川青年が残雪の残る小樽駅に降り立つ場面から始まります。大学に入ってすぐに都市社会学に興味を持ち始めた堀川青年でしたが、講義の内容にどうにもリアリティを感じ取ることができず、「来る日もくる日も、講義は「実感」を欠いたまま進行して」いきました。そこで「「書を捨て」るのではなく、「町へ出」て、現実がどのように抽象化され作品化されていくのか、そのプロセス全てを自分で経験してみよう」という考えに至り、お兄さんのアドバイスもあって大学1年生の春に小樽へと向かったのです。それが自分にとって「大学生活再生作戦」であったとも述べています。

小樽に到着したその日、つてをたどって紹介された小樽運河保存運動のキーパーソン、山口保氏に堀川青年は会います。山口氏は、いくつもの缶ビールが空になり朝刊を配達する音が聞こえてくるまで、飽くことなく運動

について語り続けます。そして、この時、堀川青年の中で社会学の研究がゆっくりと、しかし確実にスタートしたのでした。

重厚な調査に支えられた本書の内容はまさに圧巻。まちづくりに関心がある人や聞き取り調査に関心がある人には、是非読んでほしいです。504 頁という大著に挑むのも、コロナ禍だからこそできることかもしれません。そして、コロナ禍のその先にある自分についても考えてほしいと思います。

本書の評価は高く、3 つの学会から学会賞を受賞しています。日本都市社会学会の大会での受賞スピーチがまたよかったのですが、そう言えばこんなことも言っていました。

「山口保さんはサカナクションの山口一郎さんのお父さんなんですよ」。マジカ！だから小樽なのか！サカナクションのファンにとっても本書は必読書かもしれないですね。

そうだ、 図書館へ行こう！

横 山 均

(実践経済学科教授)

佐世保校の学生生活実態調査を見て驚いた。図書館の一週間の利用時間を尋ねている。「利用しない」が 59% だ。去年は 58% だ。まさに宝の持ち腐れだ。利用しない学生には、価値を教えて差し上げたい。

「横山君、これ以上勉強するな。狂うぞ。」小学生の時に担任から言われた。テストの終了後に一人だけ職員室に呼ばれた。苦笑いが担任の顔に張り付いていた。私は反論した。「今回だけは、90 点しか取れていません」担任は念を押した。「いいか。分かったな。」知能テストだった。担任でも 70 点を取れない代物だったらしい。

気の弱い私は、担任の指示に従った。真面目に授業を聴かなくなった。この態度は、後

年自分をどん底に落とした。皆さんは真似ないでほしい。しかし、学校の図書室には毎日行った。あらゆる分野の本を読んだ。特に推理小説と歴史・地理にはまった。歴史探偵になり時空を超えることを夢見た。図書室にない本は、親に頼んで買ってもらった。卒業前には、図書室で読む本が無くなっていた。図書室は、学問から脱落しそうな自分をつなぎとめてくれた。併せて国語と社会を受験の鉄板科目にしてくれた。

「このままでは駄目になる。」大学2年の秋に思った。ようやく入った東大だが、多くの友人ができた。麻雀、ディスコ（クラブ）、酒の日々だった。駒場キャンパスの近くにワンルームを借りていた。友人の溜まり場になった。こんな生活では、国家上級公務員試験に落ちる。東大経済学部でも、2 割弱しか合格できない試験だった。

思い切って友人たちとの消息を絶った。1・2 年の駒場を避け、3・4 年の本郷に向かった。図書館に毎日通った。朝 9 時に入り、夜 9 時

に出た。学習室には、学生たちが鬼気迫る勢いで勉強していた。合格率3%の(旧)司法試験を目指していた。この中に身を投じた。勉強に疲れると、日経新聞や経済セミナーを読んで、気分転換をした。おかげで、国家上級公務員試験は、3年時に合格した。なお、駒場では、「遊び人のキン(均)ちゃんが消えた」と騒ぎになっていたようだ。

「中室先生が言うとおりの、幼児教育は、人生の決定的要因になるか。」2019年秋、東京永田町の衆議院議員会館。S議員の発言だ。政府の行政改革をめぐる激論を交わしていた。自民党の責任者はS議員。政府の責任者は私だ。しかし、妥協点を見出せない。議論は暗礁に乗り上げた。S議員は、陰湿なムードを和らげようとした。慶応大学の中室教授の『「学力」の経済学』を話題にした。

「中室先生は、ヘックマンの『幼児教育の経済学』を引用しています。これには、後天的な教育も重要だと指摘しています。」「ほお、そうか。」「私自身、幼稚園は1年だけ、塾や習い事はありません。中室先生の理論では、私は、異常な値として統計から弾かれるでしょう。」実は、S議員は、大蔵省局長を経て大臣になった父を持ち、自身も日銀を経て官房長官等を歴任していた。お育ちのよいS議員への軽い皮肉だ。

2013年から、課長から総括課長、次長、審議官、局長筆頭へと昇進を重ねた。ほぼ毎日、大臣、副大臣、政務官のほか、国会議員と議論していた。もちろん、担当する政策の説明能力は必要だ。しかし、雑談力も重要だ。政策以外の話題を振られた際の対応能力だ。

このため、新聞の書評欄や広告欄を読み、面白そうな本を選んだ。目黒・世田谷・港・新宿区の4つの図書館のHPを検索した。最も早く借りられる図書館で予約した。毎週末に合計10冊ほど借りた。ただし、最後まで読むのは7冊ほど。面白くないと感じたら読むのをやめた。厚い本は、途中まで読んで、いったん返した。図書館では、新聞や雑誌を速読した。閲覧室を散策し、面白そうな本はないか探索した。週末の図書館は、政治との折衝で擦り減った自分を再生する場であった。

図書館の活用により「破天荒」を為しうることが、お分かりいただいたでしょう。皆さんが、それぞれに合った図書館の活用法を見つけ、更に飛躍されることを祈る。

図書館からのお知らせ



長崎県立大学 佐世保校 附属図書館

Twitter はじめました

開館情報

イベントのお知らせ

日常の様子

司書のつぶやき

その他図書館情報



お問い合わせ TEL 0958-47-5958
長崎県立大学 佐世保校 附属図書館
〒858-8582 長崎県佐世保市山下町122
<https://twitter.com/atagon2021>

◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
 - 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）
土曜日：午前9時～午後5時まで 休館日：日曜日・祝日・大学閉校日など
- 現在、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学外者の利用は控えさせていただくなど利用制限を行っています。

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会 発行日／2021年11月30日